

會



報

1966年2月

248

日本山岳会

槍ヶ岳☆文献展

山崎安治

出品目録

(カッコン)

(出品者)

秩父宮の山旅

秩父宮の思い出

出

高島北海書

鎗、穂高屏風

(以上松方三郎)

播龍拓本「南むあみだ仏」

武井真澄「槍ヶ岳」墨絵

山川勇一郎「槍ヶ岳」水彩画

絵図「信濃国全図」

(以上小野 幸)

上高地仙覚(写真複写)

播隆(槍ヶ岳開祖)

People of All Nation

Inaka Vol. 14

(以上穂刈三寿雄)

アルピニストの手記(神谷恭)

年次晩餐会の添えものとして、

「一本展」という図書、文書展を開

くのは今年(昭和四十年)で四回目

だが、今年は槍ヶ岳に関する記録、

文献を展示することになった。欧

州では今年マッターホルン登頂百

年を祝って、色々な行事や、ア

ノルド・ランの「マッターホル

ン・センチナリー」が出版され

たのに因み、日本のマッターホル

ン槍ヶ岳展をやるとういうことにな

ったわけである。穂刈三寿雄小

野幸氏らを始め

御協力いただいた

方々にお礼申

し述べる。

マッターホルン登頂百年記念銀
メダル
(藤島敏男)

Hand book for Japan

北アルプス

現代登山全集二巻

登山の夜明け

大山町史

歴史の山旅

遠い湖

山の画帖

リュックサック一、二、三、四

登山行 四、五、九

ケルン三号

日本山岳全集六巻

鎗ヶ岳探険記

Mountaineering and Explorat-

ion in the Japanese Alps

アルピニズム四号

(以上山崎安治)

梅、鳥、鶯

日本風景論

日本山嶽志

「山岳」一ノ三、二ノ三、三ノ

三、五ノ一

山谷放浪記

日本百名山

偃松の匂ひ

登山の先駆者

永河と万年雪の山

日本アルプス二、三巻

ハイランド

The Playground of the Far

East

山と雪の日記

穂高星夜

RCC報告五号

甲南高校部報創刊号

山想五、六合併号

雪山のあけくれ

山の憶ひ出 下巻

Alpine Journal No. 238

(以上JAC)

槍ヶ岳写真三点 (関口周也)

槍ヶ岳登山年表 (山崎安治)

なおこの文献展のため特に「槍

ヶ岳登山に関する主要文献ならび

に解題」をまとめたが、印刷の関

係で当日会場でガリ版ずり半分の

ものきりお渡しできなかった。い

ずれももっとわしく調べ何らかの

形で発表しておきたいと思ってい

る。印刷は大橋 晋氏にたいへん

お世話になった。

CAUCASUS 情報

記

一九六五年十一月三十日ソ連ア

ルピニズム連盟

国際スポーツ交流局

局長代理Vウシヤコフ

日本山岳会

松方三郎殿

尊敬する会長様

四月二十日附、貴下のお手紙

正に受取りました。差(当り)

私達は、カフカズの山々を目指

す日本のアルピニスト達をソビエト連

邦に受け入れる計画はありません。日

本のアルピニスト連邦に受け入れるこ

カフカズ登山不許可

会報二四二号十一頁に福田安年氏が

「バミールの雪」と題して昨年五月に

モスクワでソビエトの山への入山交渉

をされてこれた経緯が報告されてい

るが、これに對しての度十一月三十日

付にて、国際スポーツ交流局長代理ウ

シヤコフ氏より左記の通り、日本のア

ルピニスト達をソビエト連邦の山に受

け入れる計画はないとの返事が届いた

のでお知らせする。

目次

槍ヶ岳文献展・主要文献抄並びに

解題(山崎1・2) 続・日本のア

ルピニズム(安川3) 岳連十周年記

念(高橋4) 海外遠征報告(同社

・静岡4) 図書紹介(田中・日

大・江上5) 会員通信(II

高・吉沢6・7) 海外登山懇談

会・学生部報告・東京支部(10)

新入会員他(11)

カフカズ情報(1) 山内のピッケ

ル(2) 関西支部より(2) ベル

ン・アンデス遠征隊表(一九六五

15)

槍ヶ岳登山に関する

主要文献抄並びに解題

山崎安治編

(I)

- 一、総記および案内に関するもの
(最近のガイドブック類は除く)
- 二、播隆上人に関するもの
- 三、早期登山に関するもの
- 四、積雪期登山および岩登りに関するもの
- 五、宮城登山に関するもの
- 六、その他

一、総記および案内に関するもの

○Hand Book for Japan Chamberlain, B. H. Mason, W. B. J. Murry (Fourth Edition)
第二章 セントラル・ジャパン、ルート三十、Mountain of Hida and Echū の中、Yarigatake 10,000 ft. として紹介。

○日本風景論 (志賀重昂) 政教社 明治二十七年
中部日本の花崗岩の山として槍ヶ岳をあげ、海拔三三三一米としている。

○日本山嶽志 (高頭式) 博文館 明治三十九年
飛騨高原の部に、鎗嶽上宝村神坂より五里、安曇村宮川より六里、標高一万二百四尺として紹介してある。

○槍ヶ岳の標高 (辻本満丸 山岳二ノ三)
当時槍ヶ岳の標高がまちまちであったため、明治四十一年の登山に際し、空倉晴雨計により測定の結果三、一五〇米となり三千米を越えていることは確実と述べる。

○鎗ヶ嶽と槍ヶ岳・雙六谷と双六谷 (小島鳥水)

「山谷放浪記」所載
青木書店 昭和十八年
天保八年刊の古図「国郡全図」にヤリガタケの名称の記載を発見を記し、槍ヶ岳は古字に従い鎗ヶ嶽と書くべきではないとする。

○槍ヶ岳 (小島六郎) 北アルプス 三省堂 昭和十二年
槍ヶ岳の大観、各方面からの登路などについて述べる。

○槍ヶ岳 (深田久弥) 日本百名山 新潮社 昭和三十一年
その歴史や山の個性などを説明し富士山が古い時代の登山の対象であったとすれば、近代登山のそれは槍ヶ岳だと結ぶ。

○槍ヶ岳 上高地、現代登山全集二巻 創元社 昭和三十六年
槍ヶ岳高についての総合的な案内書、各種の初期の記録を収録する

二、播隆上人に関するもの
○信州鎗嶽署縁起 (播隆) 天保七年
松本の大坂屋佐助が天保五年八月播隆再度の登山に従い、喜びのあまり播隆登山の動機と素願成就を口述し版に刻したものである。

○三昧発得記 (播隆) 天保五年
播隆が槍沢に参籠中笠ヶ岳まで縦走したとみられる文章がある。(玄向寺蔵、徳川・播隆による)

○迦多羅尊再興記 (播隆) 文政六年
文政六年夏笠ヶ岳に登り、槍ヶ岳開山の意を固める。(本覚寺蔵、徳川・播隆による)

○開山時播隆大和上行状記 棚橋智仙 発行 明治二十六年
播隆上人の伝記

○槍ヶ嶽乃美観 (丸山文台) 高見屋書店 明治三十九年
明治三十六年八月筆者ら一行の槍ヶ岳登山日記。槍沢で米人フィシヤー(のち鶴殿正雄と穂高、槍初縦走をなす)の写真をとっている。本書の「槍ヶ岳の開祖播隆和尚」は「開山時播隆大和上行状記」を基にその他の資料を加え上人の生涯をよく伝えている。

○槍ヶ岳略縁記に就て (笠原鳥丸) 山第二巻九号
昭和六年三月筆者が岐阜県太田町で本書を初めて発見したときの記事。全文を紹介し写真と載せる。

○槍ヶ岳の開祖播隆上人に関する古記録の発見について (笠原鳥丸) アルビニズム二号
大野郡丹生川村大萱横山基吉方で文化十五年から二十七年間の歴綴書込み二冊、宝暦十年から天保十二年までの横山六兵衛書「諸国大要聞書、不思議成事集書」を発見播隆の貴重な資料を得る。

○播隆院護持の発見について (笠原鳥丸) アルビニズム四号
昭和五年十一月岐阜県太田町祐泉寺で播隆の護持仏、一心寺で上人常持の鉄鉢など発見のいきさつ。

○穂高にも登っていた播隆上人 (笠原鳥丸) 山と高原二八二号
昭和三十五年播隆の生誕地を越中上新川郡大山村字河内と確認、その際発見した古絵図に穂高五七峰に仏安置と記されている点から播隆は穂高にも足跡を残していることを推論する。

○飛騨笠ヶ岳早期登山者圓空、南喬、播隆 (小島鳥水) 「櫻松の匂ひ」所載 書物展望社、昭和十二年
播隆上人の生涯と槍ヶ岳登山 (熊原政男) 山と溪谷一三四号

○播隆上人笠と槍ヶ岳を拓く (熊原政男) 「登山の夜明け」所載 明文堂 昭和三十四年

○圓空と播隆上人 (熊原政男) 「登山

の先駆者たち」所載 校倉書房 昭和三十八年
○槍ヶ岳開祖播隆 (穂高三寿雄) 新信州社 昭和三十八年
播隆の生涯に関する決定版。遺墨、遺品、目録、年譜、参考文献を付す。

○播隆上人 (大山町史編纂委員会) 大山町史 所載 大山町役場 昭和三十九年
播隆の生家旧大山村河内にちな

☆

山内のビックルについてお願い
山内東一郎さんが火災に遭った。幸か不幸か、留守中の火事ゆえ、家族一同に怪我はなかったのであるが、そのかわり何も持出することができない全焼となった。山内について、いまさら紹介するまでもなからうが、日本で一番古くからビックルを作った今日に至った名工である。当年七十三才。いまでも日本でも優れたビックルが数多く売られていたが、戦前には国産品としては、山内に注文して作って貰うばかりはなかった。私の学生時代には、納期はたしか六月ほどである。その後、門田でも作り始めたが、やはり注文製作であった。

山内は名人気質の強い人である。ビックルやハンマーを自分の気に入るまで、うけに走ることなど彼の最も嫌う所であつた。いつも清貧に甘んじている。われわれ古い型の登山者の気持にぴったりのおやじさんである。仙台の数多くの岳人から、単なるビックル作りとしては、深く親しまれているゆえんであらう。

み、その生涯を要領よくまとめてある。

○日本アルプスの古い街道 (安川茂雄) 「歴史の旅」所載 有紀書房 昭和三十六年
文政年間播隆の開いた小倉村から上高地へ至る古道を探る紀行。

○槍ヶ岳 (爪生卓造) 「遠い湖」所載 明文堂 昭和三十三年
播隆の生涯を史実に基づいて小説にしたもの。(次号に続く)

☆

いま山内夫妻、御長男夫妻、孫二人の家族は仙台市本楨丁、東北劇場(本会会員渡辺徳氏経営)に身を寄せておりその再起については、宮城県山岳連盟その他の諸団体が世話している。さて今回の火災は全焼であるが、山内老が最も気を落としていたのは、ビックル製作名簿を焼失してしまったことである。いま宮城岳連の常盤副会長の手によって、名簿再編が進められているが、ついでには山内のビックルを御所持の方、または所持者をお知りの方は、住所、氏名とともにそのビックル番号を、早速左記に御通知下さるようお願いしたい。

仙台市表小路 仙台市役所 広報課 伊藤 篤 郎氏
生涯かけて作ってきたビックルの数々がいまだうなっているか、一日も早く考人に知らせて上げたいものである。(金坂一郎)

関西支部よりお願い
関西支部会員は今後、本部会費 年二二〇〇円、支部費 年四〇〇円、計一六〇〇円を関西支部に納入して下さい。

送り先 大阪市北区老松町三の十二 日新ビル
日本山岳会関西支部 振替大阪五五九五〇



随想

—大島さんを中心として—

日本のアルピニズム (III)

安川 茂雄

昨年師走二十六日から新年の中旬とかく約半月間、私は飛騨と越中へすごした。はじめの十日間は、新穂高温泉中崎山荘をベースにしてグループの天狗尾根登山をサボリしたり、槍平へでかけたたりして四十才になった自分の弛みかけた筋肉をギシギシと酷使したものである。

同時に機会をみつけてゆっくりと栃尾のガイド松井憲三さんに会いたかったからである。松井さんとはじめて会うというわけではない。J.A.C.の六十周年記念パーティーのときにも顔を合せているし、昨年初夏、藤木（九三）さんのレトリフを滝谷の合（つ）けたときも会っているのだが、大島亮吉についてあれこれ聴く時間がもてななかったからである。

松井憲三といえど、藤木さんと、P.T.を組んでガイド今田由勝、四谷、小島三氏の早大P.T.といの滝谷初登攀によってあまりにも有名なのであるが、私にはそれよりも大正十三年四月六日の大島とP.T.を組んでの北穂

北壁でのフアイト振りが印象に、つよいのである。堅水をナタでステップを刻んでトップにたつて攀じたガイド松井憲三の若き日の姿が私にはなによりも美しく果敢に想像されてならないのだ。なにか大島亮吉についてのエピソードでも聴きたかったのであるが、この寡黙な山人は学習院、慶応黄金時代のアルプスについて訥々としやべるにすぎず、短い中崎山荘での一夜はおわってしまった。

それでも田部重治翁にたいするのと同じように、かの大島亮吉のザイルパートナーであった一老ガイドの挙措言動に接することで私は十分に満足であった。（いささか話の筋みちが外れるのであるが昨年一月私たちのグループ日本山嶺倶楽部の登った栃尾から錫杖岳山頂をへて笠ヶ岳へつらなる主稜を「憲三尾根」と名づけてみたのも、そのようないささかフナティックな私の畏敬心にはかならないのであろうか。

※

大島亮吉の名前をはじめて私が知ったのは二十才前後のことであつたと思ふ。戦中戦後やたらと谷川岳の岩場を攀じ歩いていた頃、日本登高会編『上越の山』中の小野崎良三の「上越登山小史」においてであつたらう。そして『谷川岳研究』を書くにあたり、はじめて『登高行』を借覧し、『山研究』と随想をよんだようにおもふ。あるいは岩波版ではなくて松方（三郎）さんの編じた好日書房版の『山』であつたかも知れない。

谷川岳の岩場開拓者として、私は最初は大島亮吉の名前を知ったのであるが、それ以上に彼の存在を鮮明に感得し傾倒したのは、この詩人的な資質であつた。『荒船と神津牧場附近』『頂、谷、書斎』『峠』『小屋、焚火、夢』などに示された詩人の眼に私はつくつく惹かれた。自然の一部である山とそれ

日本岳連十年記念会。。。

全日本山岳連盟創立十周年記念会は昭和四十年十一月二十日、午後二時—四時、東京新橋の第一ホテルで開催された。北海道、四国、九州からの出席もあり約一三〇名。

星野重氏司会の許に、武内副会長の開会のことばに次いで、尾関会長より挨拶。高橋定昌理事長より十年間の経過報告があつた。

戦前の日本岳連は、冠松次郎理事長の骨折りでまともな日体協の加盟団体として活動していた。

戦後の再建は遅れ、混乱期に作られた日本岳連は、本部を作つて全国統合を計つた為になうまく行かなかつた。民主的な話し合いに時間をかけただけに納得のゆく形ではなかつたのが昭和二十九年の北海道国体の折で、翌三十年五月東京

をめぐる風土に注がれた繊細な情感は卓越しており、『霧の旅—以後の低山道遠派の人びとにもその先駆としてどれだけの影響を与えたか測り知れないではないか。

この詩人的資質が、単なる自然観照の場において発露されたものなのか、それとも田部翁の「山は如何に……」にみられる宗教的なプリズムとおとしとれたものかどうか、「大島亮吉の山」をめぐる重要な鍵に私にはおもえてくる。

はじめ私はこのような資質について一つの決定的な判断をもっていた。つ

日本青年館で発会式があげられた。それから十年、その間にはナイロン・ザイル事件、谷川岳登山禁止条例事件、山岳保険、海外登山十七隊、全国大会十回、リーダーの刑事責任事件、かもしか尻敷禁止事件、遭難者慰霊祭四回、奈良の原生林保護、大自然美化運動、山の遭対協議会、等々が挙げられた。

来賓祝詞の最初に松方会長から困難な岳連運動の発展に心から敬意を表する。十年は短かい、もっと永い歴史があつたと考えている。と昔の岳連運動についての憶い出話が披露された。次いで、加藤泰安氏は山岳協会専務理事の立場から、協会組織を変更して、広く全国的な大組織とする運動を行なっているので御協力を依頼する旨が述べられた。

小笠原勇八初代都岳連理事長より、私達が昭和二十二年九州国体

で口火を切った運動がここまで発展した努力に感謝する。当時の決議文を持参したので読みあげる。我々府県代表は全国山岳連盟結成を決議します。と十七都道府県の署名人を読みあげ、文書は岳連に贈られた。文部省松島スポーツ課長の祝詞などがあつた。

表彰式に移り、武田久吉初代会長に感謝状と記念品、個人表彰状、記念品は、大石実、武内重雄、工藤七郎、斎藤清太郎、塩田勝宏、荒川勘五郎、橋本三八の各氏。全国大会関係十県、海外登山六隊に對して表彰状が贈られた。

松長副会長の閉会のことばで式典を終る。第二部の宴会は、小島副会長の乾盃、中華バイキングで舌鼓をうちながら懐旧談は時間の短かい憾みがあつた。

J.A.C.よりの出席者は11頁に掲載しあり。

(高橋定昌記)

まり東京市芝区桜川町に生れたという町育ち特有の自然にたいする鋭敏な感受性と理解したのだ。堀辰雄、尾崎喜八といった詩人たちが隅田川べりの町育ちであつたように、同じ詩人の傾向かと信じたのである。私自身も下町育ちであるだけに、アリストクラシーの趣味としての伝統をもつ登山に、大島亮吉のような環境がひどく親近性をもったことはたかなうである。なんの誤認か知らないうちに、大島が芝桜川町の大工の棟梁の一人息子であつたという腹歴を私はかなりさききんまで信じていた。貴族的な学習院、慶応とい

この町育ちの人間のもつ自然観照の個性が、一つの大島亮吉の山を構成する重要な手掛りとなつてくるのではないだろうか。

(未完)



六十周年記念行事 報告 (Ⅲ)

関西支部

六十周年記念集会 と比良山周遊

昭和四〇年一〇月
二二—二四日

月よし、紅葉美しい
錦秋の一日、関西支部
では、びわ湖畔の大津
ユースセンター（会員
・津田康祐所長の御厚
意により）で、六十周
年の記念集会をひらいた。

週末の夕暮、神戸・大阪・京都在住
の会員二七名は、逢坂山を越えて比
い山麓の会場に集り、

藤木九三氏、山口季次
郎氏等の大先輩に加え
本部より吉沢一郎氏お
さわさず賑を割って御
参加いただき、この集
いに更に光彩を添え
た。遠方のため、や
遅れて午後八時に開会
藤木先輩の発声で先づ
乾杯。次いで、六十周
年のお祝いのことば、
吉沢評議員、住吉理事
より数日前の東京での
祝賀会の報告。
梶本委員より当支部
会員で、五〇年以上の



永年会員章を受けられた中原繁之助、

山口季次郎氏、及び名誉会員に推さ
れた藤木九三氏のごよびを披露し、
二本信次氏はじめ古い友人の方から
お祝いのことばがあり、山口、藤木両
氏から会と当支部について感謝をこめ
た味わいの深い話があった。水野支部
長は会の進む道と、関西支部と関西の
反骨精神について示唆に富んだ話をさ
れ、児島勲次氏は古くて新しい話を、
さらに老若の会員各々の紹介とスビー
チを終り、塚本圭一氏の解説で京都岳
連の方々のカラコルム行のストーリー
を見た。荒井清氏の宝物であるヘーデ
ンのサイン入りの稀書と、同氏宛の書簡
を拝見してひとまず前夜祭を閉じた。

翌二四日は、秋晴れの日曜日、セル
フサービスの食堂で、たのしい朝食会
の後、児島先輩等数名は比い山へ。
藤木、山口先輩はじめ十数名は、水野
支部長の音頭で、雑木黄葉の盛りを賞
ながら、サンケイバレーの見学をか
ねてリフトで比良山に登り、打見山や
蓬萊山の頂上から、近江八景を見下し
かえりし車ではびわ湖大橋を渡って京
都へ出た。記念集
会にふさわしく
まことにながや
かでの楽しい集
いであった。

当日の出席者

(順不同)

藤木九三、山
口季次郎、水野
祥太郎、吉沢一
郎、二本信次、
児島勲次、福田
正勝、新井清、
松井啓祐、林茂
宮本貞雄、金井
健二、中村重行
谷泰、石田寿郎

舟橋明男、松丸秀夫、宗実慶子、中野
明、水野政博、大木保太郎、塚本圭一
高橋正、岸田権二、梶本徳次郎、阿部
和行、津田康祐、住吉仙也
(以上二十八名) (梶本記)

静岡支部

六〇周年記念山行及び 第八回もみじ会 報告

(十一月十三日、十四日)

もみじ会も八年目を迎え、主催者の
支部も、大分馴れて来ました。参加者
の掌握、材料資材の準備も手馴れたも
ので、遠来の「お客様」にも満足して
頂けた様です。ヘン曲り大老に言わせ
れば、「まごまごして部屋割りも埒が
明かず、案内された宿はまだ出来上っ
ていない旅館だったりで、大変不手際
である」との苦言も、一同伽々大笑し
て程良い酒のツマミ。

日頃、スモッグを吸っている方々が
清らかな静岡に來たせいか眉目美わし
き大姉、中姉、小姐が十七名も参加し
たお蔭か、会は最初から賑やかで「こ
んな盛上つた、もみじ会は今回が初め
てである」と、神谷パーテンドーのお
ほめの言葉も頂いた。喰うほどに、飲
むほどに、日高氏の怪しげな「馬鹿・
利巧論」も飛び出してくる。馬鹿と利巧
のパーセントの兼ね合ひで人格が判る
との高説だが、何人判ったであらう
か。四年振りに出席した、松田氏には
ネパール土語の「ヒマラヤ・ソング」
のアンコール。相惜と本物の歌と比べ
る事が出来ないのが残念、とは誰かの
サヤヤキ。

女性群は、話の前後、そして真中に
笑声を混えての大王をころがす様な、
鈴やかな村井女史。続いてエーデルワ
イスのシンボルである坂倉トクリ子
(坂倉女史)さんの外征計画の発表と
自分の名前の間違われる事の御披露。

美人なるゆえに、トクリと見とられ
るのかな。常に御夫妻でお揃いの山行
をされる今井喜美子女史は、会員番号
は御亭主より古いとか。数々の山のエ
ッセイ本は御夫人の力大なるの声、背
後の方であり。

賑やかな女性のスビーチに、美しさ
を求める永遠の紅顔の美少年、足立源
一郎画伯より声あり、「女性はおつと
元氣を出さねばイカン」得たりとばか
り、モンキードン論の一幕を、藤島
大老にする三崎より参加の会友のお嬢
さん。

賑やかな会場ではあるが、テーブル
席で舞台が無いので、古沢 肇氏の特
技、純日本舞踊が見られなかったのは
誠に残念の至り。

夜もふけるに従ひ、参加者の自己紹
介やお話も尽きない。松方会長にシメ
のお話をうかがう。山の中で気のおけ
ない連中に話す山々の話、平易な中にも
教えられる御意見が多い。「山は登
らねばいけない」との言葉は、酒ばかり
飲んでいる者にはチクリとする。

おくれて、仕事の都合で暗夜、チー
プで馳せつけた、津の川喜田壮太郎氏
は相変らず歩度計を腰にぶらさげられ
ており、「明日は大いに歩くぞ」と元氣。
夜もふけて、明日の記念山行にそな
え、「星かげさやかに」を、山下一夫
氏のタクトで女性群のコーラス。途中
より全員の大合唱で楽しい夢路へと、
各自割当てられたルームに落つく。

六十周年記念山行

A班 大間 接阻峠 井川湖
大日映 富士見峠 静岡
B班 大間 沢口山 千頭 金
谷
C班 大間 大丸山 前墨法師
大間 金谷
3班に分れて行動予定であったが、翌
日が相惜の雨。A、B班は合流して軌

道で井川湖に向う。井川湖畔で中食す
る頃、晴れ上り、富士見峠からは南ア
の白い峰々がほいほい出て来た。
C班は藤島氏と地元会員がお伴して
雨の中を予定通り、「ヘン曲り登山。た
つぷりと南アルプの倒木の味を体験さ
れて下山された由。(山本朋三郎記)

参加者

東京より 白鳥英樹、佐古昌代、石
川伊都子、斎藤博子、瀬名貞利、福井
勉、松田雄一、斎藤かつら、保科清子
神田みえ、沢田みえ、落合美美子、三
壁千代子、高木和喜子、建石八重、深
山京子、松本熊次郎、足立源一郎、足
立朗、日高信六郎、神谷恭、藤島敏男
松方三郎、川喜田壮太郎、山崎金次郎
鈴木英一、村井米子、坂倉登喜子、小
西幸平、耕山菊郎、諸岡一、山下一
夫、古沢肇、今井喜美子、今井雄二、
牧野衛、安藤洋子、藤井英世、広瀬栄
子、中俣、島崎郁郎。(以上四十一名)
静岡支部より 山本朋三郎、川端信
治、水野公男、長田義則、竹端端次
鈴木璋一、滝浪善一、市野 弘、佐野
敏郎、岩永安雄、奥田大、西村正夫、
望月政章、望月恒一、鈴木善道、栗田
猶一郎、鈴木清一郎、太田一子、亀山
馨。(県庁職員)加藤、森、山本、遠藤
他地元関係者。(以上三十三名)
合計 六十四名

また一つの初登

二人のイタリー登山家、Annibale
ZucchiとGiuseppe Lanfranciniが、
二回のピバークを経て、マ峰南壁中央
部の初直登をやったらしい(月日不詳)
細かいいえはムチオ岩柱の南壁とい
うこと。ブルイユからはフルッケン山
後の左側に非常に特徴的によく見える
もので、南壁のアレットは一九五三年
の九月三日に Luigi Carrel, Italo
Muzio, Luigi Maguinanz が初登し
た。(吉沢)

海外遠征報告 ☆

アンデス遠征隊
同志社大学

—1965—

隊長

(I) 江上 康

登山成果

・ビコ・インカチリヤス
カ
(約五〇〇〇m 初登頂)

六・二一 小川、沢

・サルカントイ
(約六二〇〇m 第三登)

北東後初登攀

六・二一 里藤、岩間、宮本、川田
第四登六・二一 里藤、小川、沢

堀江

・サルカントイ南峰(東峰?)

第三登 同日、同隊員

・キンシャル(約五七七〇m)

六・一六、初登頂一里

藤、川田

・メリンス(各峰初登頂)

×小峰(約五三三〇m)

八・二〇 川田、小川

×北峰(約五三九五m)

八・三一 岩間、川田

×主峰(約五四一〇m)

八・三一 岩間、川田

×シマ・ロカ・リサ

×第二登(約五〇〇〇m)

八・二七 前芝、川田

モラレス

×第三登 八・二八

小川、堀江

・ネバド・ブランコ

第二登(約五二五〇m)

九・三一 川田、小川

機上よりのビルカパンバ山群
吉沢 写 (1961)

◆アマゾン源流下降

(ウルバンバ川→ウカヤリ川)

×コリベニからアタラヤまで(ゴム

ボート二隻による)約六〇〇km

×アタラヤからブルカバまで(ラン

チによる)約七〇〇km

川の下降は登山とは関係ないが一応

書きました。他にインカ道跡を二ヶ所

見つけました。という意味は、付近の

住民は知っていたが、クスコヨリで知

られていなかったということだす。

ペルー入国時の通関 問

題について

外務省より同志社大学長及び日本山

岳協会宛に抗議があったという、われ

われのペルー入国時の通関問題に関し

ましては、サルカントイ及びキンシャ

ル登頂の第一次計画が終了してクスコ

ヨリに下りて来た時に、日本から送られて

きた新聞の切抜きで初めて知り、びっ

くり致しました。

というのは事実と非常に異なったも

のでありますので、取りあえず大学

長、同志社山岳会など学校関係をはじ

め、日本山岳会松方会長、後援者の朝

日新聞、九州朝日放送などへ、われわ

れの隊としての事情説明を手紙でお伝

えておきました。

全計画が終了して全員がリマに集結

してから、在ペルー日本大使館へ離国

の挨拶と共に、外務省への報告文が重

大な事実の点で間違っている件を示し

ましたところ、担当の〇〇参事官は、

それを自分の誤りと認めながらも、公

文書にしたり、私信の形で大学長宛に

訂正文を書くという具体的な方法をと

って下さらないので、一応そのまま帰

国致しました。〇〇参事官は外務省の

係長宛に一応あの報告文が重大な点で

誤っていた件については、手紙を出し

ておきますといわれていたが、われ

われ外にとしてはあの報告文を基にし

て、外務省が大学長及び日本山岳協会

宛注意勧告をし、ある新聞のみがそれ

を誇大に発表し(密輸及びそれに類似

する言葉は外務省の抗議文には見当ら

ない)た以上、如何に外務省内部で、

如何なる処理がとられようと、それは

飽くまで外務省の内部事情ではないか

と思った訳です。

帰えりまして外務省の担当のほうへ

帰国挨拶をしに参りました折、その話

が再度出ましたが、お互いに時間がな

く、悠くり話し合うことは出来ませ

でした。大学長宛の抗議文ですので、

大学長名義で再度外務省へ抗議すべ

きが願当たったというのが、外務省であ

り食いつまなかつた理由であります。

現在大学関係、同志社山岳会関係で

この件につき検討を加えようとしてお

りますが、まだ帰国後の後整理に追

わ

れておりますので、取敢えず会報に記

載して頂いて、会員の皆様が幾分なり

ともわれわれの事情を御理解下されば

幸いです。敢えて筆をこする次第であ

ります。(次号に続く)

ペルー・アンデス (1965)

(Peruvian Times—Sept. 10, 1965,

資料提供、江上 康氏)

Cordillera Blanca

I' イタリー隊 (G. Frigieri)

Aguja Nevada (5900 m), Claudio

(5500 m), Sesto San Giovanni (5460

m) 以上初登頂。

II' 英国隊 (H.D. Whitehouse)

ワスカランの北辺を周回。

III' 早稲田隊 (井田英彦)

Oshapalca (5881 m), Ramapalca

(6162 m), Ishinca (5350 m), Urus

Este (5420 m), その後ワマン・山

群に入る。

IV' 上智大隊 (細野淳美)

プランカの Chinkey (6222 m) は

失敗したが、北方の Pallasca 地方に

おいて Rosco Grande (5260 m), Nev.

Tanikawa (5240 m), Cuello Con-

dor (5260 m) その他に登る。

V' スイス隊 (Hanspeter Jenni)

ワスカラン北峰 (6655 m), Quitar-

aju (6000 m), トン・マスター・C Adolf

Reist 参加。

六' 米国 (ヘイ・オワ隊 J. Ebert)

Ishinca, Urus, Tocllaraju, Palca-

rain W., Ramapalca 等に登る。最

後の山から下降中 Dr. Roger Whi-

tney (62), Thomas Heim (32) 滑落

死、遺体見つからず。

七' ブラジル・米国合同隊 (Dom.

Giobbi, H. Adams Carter)

Yahurajin (5675 m), Rurec (5700

m) その後 Utrashajin, Huantsan を

東方より探る。(注・ヤワラフの写真

がカーターから来た。Y)

八' カナダ・NZ 合同隊 (John Rick-

er) ワスカラン北峰 Palcaraju E. (6259

m, 新登頂、同南峰 (6100 m, 初登)

Pucaranra (新登頂) Attumonte-

puna (5415 m)

九' メキシコ隊 (Ubaldo Martinez

Pineda)

アルパ・ヨの北西登路探る。メキシ

コ登山界の元老 Leoncio Montero

(60) が Attumonteapuna に登る。

IO' フランス・チン隊 (Fernando

Gonzales)

ワスカラン周辺を探索。

II' 南アフリカ隊 (Robert Davies)

Moncaraju (5360 m), Esparta

(5390 m) その他に登る。

III' フランス隊 (Garry Ziegler)

Ishinca 谷の偵察。

II' スイス隊 (Rudi Schatz)

Conde (5150 m), Artesonraju

(6025 m), Ramapalca, Ishinca 等

Gaby Steiger (43), Loti Sperry

(40) の二婦人は、ランパルカに登

った最初の欧州人女性。

IV' フランス隊 (Emilio Valles)

レン・カ西峰 (5225 m), 同東峰

(5530 m), Urus E. (5420 m)。

Cordillera Huayhuash

I' スイス隊 (Willy Utendoppl-

er)

Everester 峰を Ernst Schmied

参加。

Raura Group と Caballero (5050 m

& 5100 m), Patrón Sur (5200 m),

Condorencia (5320 m), 次にワイ

ン・カ・ネリ Rasic N. (5247 m),

Tsacra Chico N. (5513 m), Mexico

(5063 m), Rasic Grande (6040 m),

Jahua N. (4933 m), Jahua E. (5036

m), Yerupaia S. (6515 m)。

全部で23隊、次回完結 (一)



図書紹介

洋書
若干

田中栄蔵

この頃はツンドク方が多くなりつつあるが、それでも興味のあるものは求めてしまおう。そのうちから若干の手引をしてみよう。

Sir Edmund Hillary and Desmond Doig: High in the thin cold air. Garden City: Doubleday & Co., 1962.

一九六〇—六一年ヒマラヤ遠征隊の報告。この本の一部はヒラリーの「雪男」をさがして「二部がヒラリーの「雪男」中のわれらの生活」で「アマ・ダブラム初登頂と「カール」無酸素攻撃である。二部は全員丹部節雄記『雲の中の九ヶ月』という単行本になっている。

英国版は一寸見たのだが、この米国版は写真がほとんどカラーである。余り色はよくないが、米国版は高価なので余り買いたくないが、オリヂナルという点では、求めることになる。

Peter Mulgrew: I hold the heights. Doubleday, 1964.

雲の中の九ヶ月の中でマカール攻撃の途中、滑落が起り第七キャンブで著者マルグラーは右肺栓塞症にかかる。前書も二が圧巻である。その苦闘をどう述べているかが、この本を求めた動機である。死に直面した彼の真実を知ることができた。書誌学的には、この本は「ニージーランド」では No. Place for Men という題名で刊行された。どちらがオリヂナルであるかは知らない。

Sir Ed. Hillary: Schoolhouse in the Clouds. London: Hodder &

Stoughton, 1964.

一九六三年のヒラリー遠征隊の報告書。ヒラリーが横断りや学校建立遠征をしていることは有名だが、これはその後の例である。後半はタウチエと峻険なカンガの初登頂記。本書はアメリカで印刷され、写真は全カラーで前者より色彩は美しい。

Nepal and the Gurkhas. London: Her Majesty's Stationary Office, 1965. 17 s. 6d.

英国とグルカが一五〇年前に結ばれたを記念して作られた本である。ネパールの知る手頃なものとえよう。特にネパールの種族の分布と解説は貴重である。シエルバ族はごく少数民族であることがわかる。民族学を学ぶ方にはもちろん、ネパールに出かける人は一読しておきたい。

B.C. Olschak: Silkim. Himalajstakt Zwischen Gletschern und Dschungeln. Zürich: Schweizer Verlagshaus AG, 1965.

著者はウィーンの学者。目下入国禁止の国であり、登山の面では余り参考にならない。この国が現在おかれている状態と社会などを勉強するには唯一の本であろう。写真(カラーを含む)美事である。

Mario Fantin: I Quantordici "8000". (Antologia) Bologna: Zanichelli, 1964. Lira 5800.

この本はK2のカメラマン、マリオ・ファンティンが編集した、八〇〇〇米峰一四座の初登頂記録の選集である。とりわけ単なるアンソロジーではない。記述は前置きがあり、登頂順に編みかかれている。まづその山について、四色刷りの地図(ルート(赤)、山系黒、山、水系水色)、「ルート」詳細地図、その山の東西南北から見た山姿のペン画「山名の由来と概念」ルート図(ルートは赤、青など)。(各年度の

図(ルートは赤、青など)。(各年度の

テント位置、到達地点)、登頂者の略歴、登頂記(一番古いのは「世界の山々」その他会報、著書からの訳出)、写真、解説的な附録の順になっている。マナルスの山名由来と経過では、マナルスを Il monte dello spirito としている。続いて H-1 のつた横さんの The Ascent of Manaslu で終つてゐるのは、若干もの足りない。

附録としてイタリア人による「大約八〇〇〇」といふガシヤルム四座とカンジュー・サールがついてゐる。また七峯の極地法グラフが三色刷でついている。若干資料不足のところもあるが、まづ完璧な編集といえよう。この本はヴァルター・ボナティ監修による「山岳」双書の第三冊目である。

「Matterhorn Centenary」 by Sir Arnold Lunn, Allen and Unwin, London, 1965 25 s., p. 130.

ラン著「マッターホルン百年」

日高信六郎

ウィンバーのマッターホルン初登攀百年記念出版の著書としては、山とスキーに熟達し、一生の大半をスイスで過ごして、その住民と内外著名な登山家とに親交のあるアーノルド・ランにまかせるものはあるまい。

何故人は山に登るかの解釈からはじめて、マッターホルンの名称の由来やツェルマットの住民と初期の訪客、ホテル・モンテ・ローザを開いてツェルマットを英国山岳会の本拠、登山家のメッカに仕上げた A・ザイラーと同地の発展について述べ、ついでマッターホルン登山の歴史に移る。

著者はもちろんウィンバーのために多くのページを費している。沢山な文献や関係者の実話を引きながら、登山家としてのウィンバーの偉大さをたゞ

え、アルプス登攀記に不変の価値を認めるが、同時に彼の性格と行動について容赦ない批評を浴びせ、口の悪いクイーリッヂや議論好きナチンダルのウィンバーを観るのせる一方、この両大家についても遠慮なく批判を加えているのは面白い。

二十才で初めてスイスの山を歩いたウィンバーが、翌年から本格的な登山に熱中、執拗にねらったマッターホルン登頂の望を遂げたのは二十五才のときである。むわかしい顔を売った老境の彼を挿画で見ながらのわかれが、初登頂当時の肖像を見ると、今さらながら彼の若さと登頂のすばらしさが感じられる。頑強な彼は六十二才のときエジンバラからロンドンまで毎日五十五マイル(八十八キロ半)づつ歩いたと云う。

著者はウィンバーが十五才からつけ始めた日記によってその人となりを浮き上がらせ、彼が山から受けた印象の正直な記載と較べて、著書に現われた叙述の粉飾を指摘する。上級中産階級からなるアルバイン・クラブで、彼は異質の一匹狼扱いされた。

マッターホルン登頂後の遭難について世間ののはげしい非難に対する彼の沈黙に堪えかねた A・C 会長ウィルスの要請に応じて、彼が発表したものは、タウグワルダの非難に満ちていた。これについて著者は老ガイドの免をそぐと共に、ツェルマットの村人の間におけるウィンバーの不人気と、タウグワルダに対する信頼と同情を挙げ、序でに村人の言をひいて、英人登山家全般に対するかれらの遠慮とかくれた反感にふれ、著名なヴェネチアのハドソンに対する無名の若輩ウィンバーの反抗が強く動いていることを指摘し、ハドソンが無事に下山していたら名譽はハドソンに帰していたらとクイーリッヂの言を是認する。

彼は一度登られた山には興味をもたず、また友人がなく、ガイドを見くだし、かれらの多くもウィンバーを嫌った、といふいろいろな欠点を挙げ、登山以外には見上げたところが少ないとしながらも、人としては或る種の偉大さを持つてはるる登山家だとして彼をたゞ、彼の本領は探検家であるとしてそのアンデス遠征は在来の登山と類を異にした遠征の新時代を開いたのだと彼の周到な準備と組織力を褒める。

彼は身なり、人をおぢない。彼の偉大な不屈な性格はかの巨大な岩峯と共通する処がある。マッターホルンはいつまでもウィンバーの山である。彼の筆は簡潔直截で、マッターホルンの悲劇の叙述はツキデデスに迫るものがあり、アルプス登攀記は人が山に登る限り読みつづけられるであろうと、讃辞をもつて結んでいる。

以上に続いてカレールのイタリヤ稜からの第二登および初期の登攀を記述し、ついで婦人の初登(ルシー・ウォーカール嬢、一八七一年)から、ガイドレス初登(カスト、ケウード、コルグレイヴの三名、一八七六年)―当時(A・C 内部のガイドレス論争を語る―冬季初登(ヴィットリオ・セラ、一八八二年二月)、マンマリとツムット稜(一八七九年)―彼の登山家としての伎倆とその文章および山に対する熱情をたゞえる―ギド・レイとフルッケン(一八九九年)―レイの山岳信仰とそのモンテ・チェルビノを推薦する―一風変わったマッターホルン登り(雙脚のウィンスロップ・ヤング、一九五三年?)―彼について先年ノエル・ペーカー卿の実話(会報第三二四号)を聞いた筆者には特に興味があふかい―北壁とシュミット兄弟(一九三二年)、冬季北壁初登(フォン・アルメン、一九六二年二月)、冬季北壁単独登攀(ボ

"On the Heights", Walter Bonatti,

訳者—Lovett F. Edwards,
Rupert Hart-Davis, London,
1964. 原書は "Le mie mon-
tagne", Nicola Zanichelli,
Bologna, 1961, (初版)

ナッチ、一九六五年二月)までを洩らさず載せてある。
本書執筆に当たって訪ねたツェルマツトで旧知から聞いた逸話を記し、ウィンバーの知己であったビナーおばさんを語る。モンテローザ・ホテルは山岳宗の先達の記念に建てられた殿堂で、単なるホテル以上のものがある。登山はスポーツに留まらず、その歴史はいさゝか新宗教の勃興に似た処がある。教会宗教をはなれた登山家の多くが山岳崇拜にその代償を見出そうとつめた。教会を棄てたレスリー・スチーブが、新しい偶像を見つけたことが必要ならば、影の人格をそなえていると思われる偉大な岩塊の前にこそ、理屈ぬきでひれ伏し度くなると云った言葉を引用し、この聖山の讃歌をもって全篇を結ぶ。
全巻を通じて、控え目な筆致のうち、著者の長い山歴から来る深い知識と、広い知友との友情をみなもらせ、登山を単なるスポーツ以上のものとしてA・Cの奥の院たるツェルマツトとその村人、山をうやまいそこに魂と命をかけるアルピニストの姿を浮きぼりにした好著である。
(完)

(II)

こうし
た人工手
段が簡単
に使える
岩ばかり
の登攀で
はそれは
本当に有
効かも知
れない、
然し水や
水と岩と
の混った
登攀とな
ると、そ
のような
人工手段
の存在意
義は全く
なくなっ
てしまふ。
こういう
タイプの
難しさは、
現在ある
人工用具
の使用によ
つても解
決はされ
ないから
である。
こういう
種類の登
攀に對し
て最も必
要な基本
は、高い
山という
ものをよく
理解し、
当面する
問題の特
質を如何
に評価・
判断する
かを知り、
そして最
後に、い
うよりも
肝心なのは、
予測する
ことと、
惨事を回
避する常
識を働か
せる能力
をもつこ
うである。
そういう
訳で、か
かる配慮
は、精神
的な面と
同様、単
なるスポ
ーツの分
野でも同
じなだが、
真実の技
能に代わ
ることの
出来る穴
あけ(エキ
スパンシ
ョン・ポ
ルト)の
ないのは
簡単に解
すると思
うが、事
実、マッ
ターホル
ンの北壁
やモンブ
ランの裂
形(ピア
ットレ
スの真の
難しさは
軽減出来
るエキス
パンシ
ョン・ポ
ルトを使
うという
ことは、
これらの
偉大な登
攀路を、
純粋な登
攀家とし
ての手段
で最初に
攀じ、当
然尊敬さ
れるに値
する人々
への冒瀉
とならう
さてこの
脱線に結
束をつけ
よう。勇
気と努力
の限界を
拓ける助
けとなる
限りにお
いて、そ
のような
登攀手段
の人工的
な進歩を
認めるこ
とにおいて、
私は躊躇
するもの
ではない。
然し同時
に、そう
いうこと
は、得て
してアル
プス登山
それ自身
の退歩に
導き易く
なるとい
う危険の
あること
をも認め
ざるをえ
ないであ
る。

(未完・吉沢一郎)



会員通信

渡米挨拶
島 澄夫(五一六番)

(前略)さて今般、放射線医学総合研究所を辞し、東京慈恵医科大学薬理学教室に転任致し、今年一月より二ヶ年間に、米国マサチューセッツ州、ウースタマクス研究所にて、引続き医学研究に専念致すことになりました。
留守中は何かと御迷惑をおかけすること存じますが、よろしくお願い申し上げます。
なお寄留先は
Dr. Sumio Sina,
Worcester Foundation for
Experimental Biology, Shrewsbury, Mass., U.S.A.
チリー・アンデス隊
六五・一二・二四—
サンチャゴにつ
隊長 久野英一郎
Feliz Pascua y Prospero Año
Nuevo!

今回の遠征に際しましては一方ならぬお世話になり誠に有難うございました。お蔭様で、ネバド・フンカル(五一〇m)、セロ・アミスタード(五一五〇m)、セロ・ヤマカワ(五〇八〇m)の初登頂に成功しました。(吉沢)

アンデス学術遠征隊

名古屋大学高所医学研究会
日本山岳会東海支部

隊長 高木 健太郎
隊員一同

謹啓 いよいよ御清栄の事と御慶び申し上げます。
さてアンデス学術遠征隊の出発に際しましては、多大の御協力を賜わり、深く感謝申し上げます。
おかげさまで、一行十三名は、去る十二月一日南米に着き、唯今現地の基地プンテ・デル・インカに向つております。
隊員一同、力を合せて目的をはたす様、努力いたします。
以上お伝えしましたが、御挨拶申し上げますと共、御指導をお願い申し上げます。 敬具
(吉沢宛)

アンデス隊第二信

東海支部
アンデス遠征隊一同

今回の遠征に際しましては、多大の御協力を賜わり感謝いたしております。お蔭様で五十日の航海を終え、無事バルパライソに到着しました。
船の生活は仲々快適でしたが、今は一日も早く山に接したく思っております。隊員一同極めて元気で張り切っておりますので御安心下さい。
まずは御報告々々御礼まで
四〇・一一・一
(吉沢宛)

南極米軍基地より

向 一 陽

南極にきました。米軍の招待で二十五日からマクマードにいます。天気が悪くブリザードが続く、どこにも出られません。エレバスはすぐ近くのように

で、ぐんと遠く、とうてい一人では行けません。広いのに呆れています。太陽が沈まないのにはうんざりしています。この切手はマクマードの近くのニュー・ジブラード基地で買ったもので、価値があるんだそうです。
一九六五年十二月六日
マクマードにて
(吉沢宛)

ニマ・ガルトゥエンのこと

一昨年夏大阪市の招きで来日し皆様の暖い歓迎を受けました故ガルトゥエン・ノルブの長女、ニマが、昨年十二月十日、バンジャビのソング氏と結婚したという喜ばしい便りが届きました。新婚旅行がで、もう一度、日本を訪れたいということも書いてありました。なお、引続きカルカッタに住み、アサヒ・ガラスに勤務しております。
(杉浦耀子記)

Tierra del Fuego I

AAJの編集長 H. Adams Carter からの便り(Jan. 3, 1966)によると、アメリカの E. Jack Miller (隊長)、Paul H. Dix, Roger Hart とアルゼンチンの Peter Bruchhausen の計四人が、目下マゼラン海峡の南の火の島ティエラ・デル・フエゴで活動中である。
四人は最初、英国の Eric Shipton を仲間に入れたと考えていたが、丁度その時期に、アルゼンチンとチリーの国境問題解決のため、その委員会から招聘されてしまったので、参加させることが出来なかった。
シブトンは一九〇七年生れだから今年には五九才、驕面の顔しか知らないの、で余程の年寄りかと思っていたが、私よりも四つ下だ。働ける筈である。
(吉沢)



氏 吉 氏 招 展

新着海外図書雑誌

Journals Arrived in

December 1965

1. Appalachia Bulletin Vol. XXXI N. S. No. 9, September 1965.
2. Rivista Mensile Vol. LXXXIV, Nr. 9-Settembre 1965.
3. G. O. Dyhrenfurth : Himalayan-Chronik 1963, Bern (1965)
4. G. O. Dyhrenfurth : Himalaya-1964 (Bergsteiger Heft 9, Juni 1965 別刷)
5. The Himalayan Journal Vol. XXV, 1964
6. Appalachia Bulletin Vol. XXXI N. S. No. 10, November 1965.

雑誌・年報紹介

Alpinismus, 3 Jahrgang, 10, 1965

Toni Hiebeler により一九六三年にシモン・ペンで刊行された山岳雑誌である。本年一月号から本会でも購読する運びにしたが、それに先立ち「山岳」書評の掲載号として出版先から送られてきたので紹介する。

商業山岳雑誌のなりたつのはドイツと日本のみにいわれるが、この Alpinismus は同じドイツの月刊誌 Bergsteiger と共に内容の充実している

ことでは定評がある。特に Toni Hiebeler という実戦的クライマーであるエディターは、極めて意欲的に原稿を集めており、雑誌のサブタイトルに Internationale Informationen für Bergsteiger とうたっているだけに世界三十二ヶ国に通信連絡員を置いて最新の情報を蒐集している。

日本の項をみると、北博正、桑原武夫、出海栄三氏の名がみられる。アメリカは H. Adams Carter、ペルーは César Morales、ネパールは J. O. M. Roberts といった様に代表的の Bibliographer を網羅している。

この十月号は英国を特集しており、その内容を紹介する。

Die Pioniere von D. F. C. Danger Britishe Sternstunden seit 1945 von Alan Blackshaw.

Unser Bergrettungsdiens von A. S. Pigot

Der Alpine Club von A. K. Rawlinson

Der Mount Everest und die britische-Öffentlichkeit von Sir John Hunt

Tendenzen des britischen Bergsteigens von Christian Bonington

Portrait: Meine Freunde, die Engländer von Toni Hiebeler.

Bergsteigen und Jugend von Sir John Hunt

Britische Bergliteratur seit 1945 von T. S. Blakeney

その他 Michael Ward による Annapurna, 六〇〇〇呎の六級のルートでの登攀記録。一九六五年ブレ・モンスーンのネパール・ヒマラヤ・クロニクルは、カトマンズの J. O. M. Roberts が執筆しており、登山禁止令のいきさつや一九六五年ポスト・モンスーンの情勢についても最新のニュースを提供している。

Appalachia June 15, 1965 Vol. XXXV No. 3

Appalachia 山岳会では毎月 Bulletin をだしている他、六月と十二月の二回ジャーナルを発行している。

一九六五年六月号には合衆国の山の Lydia Goetze によるフランスカ Hayes Range の初登記録、Bruce Davis による Tasmanian Challenge, Joyce Dunsheath による Mithun's Expedition の記録であり、目下、本会でも話題になっている日印合同婦人登山隊の相手方の様子を知らぬのに好適な資料である。

Jahrbuch des Deutschen Alpenvereins 1964 (Alpenvereinschrift Band 88)

ドイツ山岳年報一九六四年号は、ドイツ南部の Garmisch-Partenkirchen の南にある Wetterstein Gebirge と Miesinger Gebirge を特集している。付録地図もこの山塊の二五〇〇〇分の一の地図を付している。

他に二つの困難な壁という題で Walter Spitzenstätter がゴールドカ

ブル南壁とアイガー北壁を Liselotte Buchenauer が三人の婦人登山家を執筆している。

海外の記録としては Gerald Gruber による一九六二年の Noshag 興味ある報告として、一九五五年カン・グルーに登頂した Fritz Loblichler がその山麓で発見した Yarsa Günü とチベット人がよんでいる冬虫夏草。即ち、冬の間は動物として虫の形で生活し、夏のモンスーン中はその虫から草が生え植物の形で生活するという珍らしい生物のことを報告している。

Harvard Mountaineering No. 17, May, 1965

マサチューセッツ州ケンブリッジにあるハーバード大学の山岳会 The Harvard Mountaineering Club は英国のケンブリッジ、オクスフォード等に比肩しうる大学山岳会の名門である。一九二四年創立であるから五十周年のお祝をすませた慶賀登高会などに較べて歴史は新しいが、H. Adams Carter, Henry S. Hall, Jr., Noel E. Odell, H. Bradford Washburn 等のメンバーを有し、最近の活躍はめざましいものがある。

本書の内容を紹介すると、巻頭が H. Adams Carter による Mount Foraker の南東稜、Larry Muir による Hayes Range に於ける初登頂、Dave Roberts による An Attempt on Mt. Deborah と最近、毎年わかつけるフランスの記事をならべている。その次がヘル・アンドレスの難峰 Nevado Charraju を Henry L. Abrams がまわっている。ついで Richard G. C. Millikan が一九六三年に登攀した Mt. McKinley の Wickersham Wall を Boyd N. Everett, Jr. がセント・エライアスの一九六四年のアラスカ大地震の遭遇記を

更に Edwin M. Bernbaum がエクトワール・アンドレスの The South Antizana の初登頂の記録を執筆している。巻末には、会員による記録、会員名簿をのせている。In Memoriam には、一九六五年三月十四日に Mt. Washington の Huntingdon Ravine のビナル・ガリーの登攀中、一九六三年のエベレスト Dan Doody と共に墜死した Craig M. Merrihue (1934-1965) の追悼がされている。すぐれた記録を有し、囑望されていた若きクライマーの死をいたみ、同会の中に

を設けたことが付記されている。この大学のクラブの年報に七隊もの遠征記録が収録されているのもめずらしいが、紙数の関係があるかも知れないが、地図が一枚もないのは寂しい。(松田)

Rivist Mensile Vol. LXXXIV No. 9 Settembre 1965.

イタリア山岳会の会報九月号は詳細なベル・連征の報告をのせて充実している。

巻頭に Annibale Bonicelli が La Spedizione Bergamasca 1964. Alle Ande del Sud Peru と題して一九六四年に南ペルーワシントン山群へかけ、Tasca Grande 等を登攀した詳細な遠征報告をのせている。この地域を訪れる遠征隊には地図や、ルート図もあるので参考になる。

副: Fosco Maraini が L'Ufficiale di Collegamento Nelle Spedizioni Himalayane と題してユトナヤの記事を執筆している。(松田)

QUIZ



会務報告



常務理事会

▽日時 十二月二十一日、七時

▽場所 深田理事宅

▽出席者 加藤、深田、辰沼、村木、大塚、松田、飯野各常務理事

▽議事

(1) 山川氏遺作展に後援名義使用の件。
日本山岳協会主催により、チリ大使館、日本山岳会、一水会後援により三月二日より高島屋デパートで遺作展が行われるが、本会後援名義を使用することを承認する。

(2) その他、深田理事が来春よりシルクロード踏査にかけられるので協会問題、本会の今後の運営問題、会員制度特に定款改正に伴う会員制度等につき、深田理事の意見を中心に懇談した。

常務理事 会

▽日時 一月十一日午後六時半

▽場所 本会ルーム

▽出席者 加藤、大塚、松田、飯野各常務理事

▽議事

(1) 定款改正の件
松田理事作成の原案について検討した。主たる改正点次の通り、

(イ) 第四条、目的の項に、遭難予防対策、自然保護の二項を追加

(ロ) 通常保護、会費を値上げする他入会金を初年度の会費を含めた金額にし、新たに国外に在住する会員という項を設ける。

(ハ) 終身会員の会費の項を、在籍年数に応じて安くし、且つ終身会費を基金としての考え方に改めて安くする。

(ニ) 永年会員、家族会員の制度を新たに新設する。

(ホ) 評議員の数を減らし、入会に際しての紹介者に支部長を入れる。

(ロ) その他字句上の若干の訂正。

(2) 支部規定改正の件
重要事項並びに支部長、支部費の金額等を本部の承認事項にする点を加える。

(3) 役員、評議員の改選について、任期を調査し、改選者の人数を確認する。

(4) 会費値上げの問題、二月の理事会で案を出すことになる。

(5) その他

一月理事・評議員会

(十三日・ルーム)

▽出席者 松方会長、三田、渡辺副会長、理事・加藤、深田、辰沼、村木、大塚、松田、竹田、杉浦、住吉、川崎、評議員・藤島、神谷、折井、村井、石原(憲)、高山、牧野、吉沢、東京支部・沼倉、静岡支部・山本(以下委任)川上理事、今西(寿)、今西(錦)、織内、望月、青木、津田、織内各評議員、松本監事

▽議事

(1) 定款改正の件(松田)

一月十一日の常務理事会で作成した改正原案を松田より説明。出席者全員この案に賛成であったが、深田理事からは終身会員は入会後或る一定の年限を経たものに限る様にしたらどうか。又松方会長からは Junior Member 制度を設けたらどうかとの提案があった。本件については四月の総会迄数回の理事会があるが、常務理事会を定款改正小委員会として更に検討することとする。

尚復活制度については、特に定款には入らず、又世襲会員(特にこの様な名称がある訳ではないが)については現在、神津得一郎、木暮友江、津田誠三氏についての特例があるが、今後は認めないことにすることを確認した。

(2) 支部規定改正の件(松田)

本件についても一月十日作成の常務理事会について特に異存はなかったが、静岡支部山本委員からは支部費の金額について本部の承認事項であるか、報告事項であるかの点につき質問あり、又高山支部長からは県外会員を認めるか否かにつき質問があった。本件についても常務理事会で更に検討することにする。

(3) 役員改選の件(加藤)

理事については、武藤理事は南極越冬、その他辞退申出者、長期に亘り任期を定めたる等六十七名の改選が予定され、加藤理事より候補者について説明があった。監事は松本氏が任期満了、評議員は村井、折井両氏を除き全員が任期満了となり、これに対し加藤理事より候補者案の説明があった。

(4) 各支部報告事項

①信濃支部(高山)

山岳協会の新方針に従い、県岳連とも相談し、従来の三本の柱をなくして、個々に県山岳協会に加盟することになり三月中を目標に努力中である。

②静岡支部(牧野・山本)

十二月に支部臨時総会を開き支部員の意見を求め、新協会の下部組織としての県岳連に加盟することに決めた。

③関西支部(住吉)

新組織の件では正式な会合は開いていないが、特に問題になる様なことはない。

④東京支部(石原)

昨年中に前後三回に亘り都岳連の責任者と会合をもって、双方腹藏ない意見を交換した。近いに第四回の会合をもって、その席上、現都岳連の規約の一部を改正して欲しい旨の要望書を添えて加盟申込を致した。この要望点は双方で確認している事項なので問題はないと思う。尚支部としては、近日中に臨時支部総会を開いてこの点の諒承を得たいと考えている。

⑤大分支部(加藤)

野口支部長からの文書による報告によると、JAC支部、大分登高会が前後して県岳連に加盟の申込を行ったところ、いずれも「当岳連の反対する事業を行ったので入会を断る」旨の返事を文書で受取り現在に至っており、しばらく様子を見た上で態度を決定したい由。

最後に松方会長より、支部の県体協加盟山岳団体への加盟の問題は、各支部ともローカルな事情があり、一様に割り切ることはできない。東京の役員が努力してまとめることが必要である」との発言があった。

(5) その他

①山川勇一郎氏遺作「山岳画集」刊行に関する件。

北海道在住会員、中野征紀氏より松方、日高、植氏等が発起となって「山岳画集」を刊行しては如何かとの提案があったが、本件は既に山岳画協会、一水会で計画があるので会としてこれを後援することにする。

②山内東一郎氏火災見舞金カンパの件。

宮城支部より協力依頼があったので、会報二四七号に掲載して会員各位の協力をお願いすることになる。(会報一九九頁参照)

③ソ連アルビニズム連盟よりカフカズ登山不許可の連絡あり(会報一頁)

④インド・ヒマラヤ登山学校、インストラクター、ウォンディー氏よりガルフール登山に対する Suggestion があったが、情勢待ちとする。

⑤大分支部名称変更の件
大分支部より東九州支部に名称変更したい旨申出の件は昨年十月理事、評議員会の席上、理由が不明確のため保留となったが、この度、事情の説明があったので、種々検討の結果名称変更を承認することにした。

⑥図書担当理事業務引継ぎの件
深田理事がシルクロード踏査のため一月十三日出発することになったので、以後の図書担当業務は松田理事に引継ぐことを諒承した。

⑦山岳60年号は一月二十日頃刊行の予定である。(松田)

海外連絡委員会

▽日時 一月二日(金)六時半

▽場所 本会ルーム

▽出席者 日高・三田・深田・吉沢・望月・近藤・丹部・大塚・芳野・松田・倉知

▽議事

(1) 山岳61年号海外遠征報告執筆依頼状況について(望月)

(2) 山岳60年号海外発送先リスト検討の件(松田)

(次頁上段へ)

モンブラン・トンネル開通記念切手

フランス発行



(前頁より)

(3) シェラ・クラブ Dr. Glenn Con-
verse 氏来日の件
本日、丹部、松田、鈴木、関口の
四名にてプレス・クラブでコンバー
ス氏と昼食をとり、今後のことを打
合わせた。

(4) 報告事項(松田)
① 連アルビニズム連盟より、カ
ズ登山不許可の連絡があった。
② フランス山岳会よりシシャ・パン
マの写真を、ラ・モンタニニに
転載方依頼があり、近藤委員より
返信を出した。
③ スイス山岳財団より、ヒマルチ
ニについての質問があり、これに
ついて、松田より返信を出すこと
にする。

④ イタリア山岳会より、日高氏宛に
「名山図説」についての興味深い
質問が届いた。
⑤ ヒマラヤ登山学校ウオンディ氏
よりガルワル登山についての親切な
アドバイスが届いたが、これにつ
いては倉知委員より返信を出すこ
とにする。

⑥ 台湾登山申請方法変更の件
台湾省山岳協会より、今後登山
申請は在日中華民国大使館を通じ
て行って欲しいとの要望が届いた。
本件については、従来からの
経緯もあるので、折井、大塚、小
味三氏に依頼して、今後の推薦方
法等につき協議願うことにする。

議事終了後、深田氏の歡送会に移り
海外登山の在り方、海外登山マニエ
ルの編集、インフォーメーション・セン
ター設立等の問題について懇談した。

第六回 海外登山懇談会

十二月六日 於JACルーム
グリードランについて

日本大学校門山岳会遠征隊
・出席者 松林敬雄、宮原誠、広谷精
啓、渡辺文明、早川潤、松田雄一、
大塚博美

昨年六月二十八日、横浜港を出航し
た日本大学グリーンランド遠征隊宮原
隊長他六名は、日本からの初の遠征隊
として数々の収穫を収め、全員元気で
十月中旬帰国し、恒例の懇談会で、次
のような体談を行った。

『ヒマラヤ、アンデスと三人寄ればそ
んな言葉が出る遠征時代なので、バイ
オニヤワークに最も適した地域として
未知のグリーンランドを選びました。
私達が予想したより以上に水原地帯
のソリ旅行は、クレパスに行方をは
まれ困難を極め、行程一七〇軒、往二
十三日、復十一日、計四十日間のソリ
旅行は初めての経験でもあり、苦痛の
連続でありました。目標の山、フォー
レル(三三六〇米)は簡単な様子でし
たが、チャンスを逸したので登らな
かった。

八月半まで雪が降り苦しめられた。
最低気温は八月末、零下一六・五度で
ありました。
グリーンランドは一九三〇年以来ヨ
ロッパから数隊入っているが、デン
マークは近いうち入国制限をする意向
であると聞いた。水河、植物などを対
象とした学術調査の豊庫といった感じ
であります。

経費は一人平均五十万位で上った。
この点でも、学術調査には絶好の地と
いえますよう。

山登り屋が、白夜に犬のようにソリ
を引き腹を減らしたわけであった、と
冗談を言っていたが、陽がけした顔に
は未知の水原を歩いた満足感がうか
えた。

尚この他、ペルー・アンデスのオクシ
ヤバルカ(五八八一米)三度目の登頂
に成功した早大伍友会 早川潤氏が同

席されたので、持参のスライドを拝見
し登頂の模様など話しをうかがった。
非常に内容豊富で愉快な会であった
が、PRが不足のためか、参加者が少
なくて残念であった。海外登山に興味の
ある方はどんな参加の程を。毎月第
一月曜が定例。(保大塚)

◇学生部報告◇

10月27日、九段会館に於て学生部年
報発行の資金と避難対策資金を集める
主旨のもとに、学生部恒例の映画会を
行った。近藤等氏と平山善吉氏の講演
初公開の早稲田大学のロウツニヤール
を含む映画四本を上映した。
11月16日、日本大学に於て、OB、
27校80名余の学生の出席のもとに、冬
山の為の講演会が行われた。
一、雪崩について 明大OB藤田氏
二、凍傷について 順天堂大学
一、東京大学スキー山岳部憲章
東大OB内田氏

藤田氏は雪崩の一般的説明と、一般
山岳会よりもな学生山岳部が雪崩に
多く遭遇するかなを例をあげて説明され
結論として現段階において、雪崩は避
けることが出来ぬものではあるが、雪
崩の危険を知ることの出来る山へ行く
べきであるとのことだった。

凍傷については、スライドを用い、
治療法、予防法の説明を行い、凍傷の
新しい治療法として効果的なのは、急
速加温療法であり、動物実験によるデ
ータにもその効果ははっきりと表われ
ていた。

スキー山岳部憲章は、六年がかりで
作成され、一般的な面よりもむしろ、
滝谷遭難を契機とした「大学山岳部の
あり方を成文化したものであり、まだ
具体的な成果を問う段階まではいって
いないとのことである。しかしこの憲
章は遭難防止を目的とし、四年間に山
岳部員が何をめざし、どこまでやるか
また部活動の細かい点まで成文化した
ことに特長があるように思われた。

なお、今年度の冬山の遭難を防止す
る為に、又、個々の大学の冬山計画を
具体的に検討する為に12月1日より4
日までグルーブ会がOB諸氏の参加を
得て開かれた。

△東京支部▽

スキー講習会報告

安彦 六郎

第十一回目のスキー講習会を一月十
五日(土)に無事終了した。いつも
ながらこの講習会への参加者は、発表
を待ちかねたようにして、多勢申込ん
で下さるのでとても嬉しく感謝する。
この多勢の参加者を擁して、毎回思
うことは、如何にして怪我人を出さな
いように、指導をするかということだ
である。そこで、各班の技術に適した地
形と雪の状態を選んで、無理のないよ
うに気を配り、安全を第一として、第
二にスキーの良さを楽しませながら、
第三に技術の向上をはかった。そのた
めか無事故に終了出来たことは幸いで
あった。

今回はめづらしく石原支部長の参加
を得て、講習会に一段の活気をもちら
した。予定していた折井監事の姿が
なかったことは一寸さびしかったが
代りに沼倉委員長の顔を見てホッとし
た感であった。

終りに各班の講師、役員諸兄の絶大
なる協力を感謝します。
講師 関口周也、鈴木郭之、村井田博
森 元一、渡辺 裕、八重樫末太、
加藤 一二、安彦六郎
役員 ドクター広谷光一郎、倉知 敬
参加者 石原達夫外七九名。

◇会員通信◇(II)

北大バタゴニア

拝啓 長らくご無沙汰いたしました。
さて、私達のバタゴニア遠征に関し

ましては種々お世話になり、ありがと
うございました。
おかげで十二月二十七日サンチャ
ゴの北約六〇〇軒のワスコという小
な港に上陸、コキンボで通関を済ませ
十二月三十一日サンチャゴからバタ
ゴニアの基地プンタアレナスには空路一
月九日到着いたしました。

チリ国への航空費は意外と安く人間
は日本の六割ぐらい、荷物は二五〇〇
kmで百円ぐらいです。

当地から隊を二つに分け、一隊はナ
パリーノ島、他は予定通りフエゴ島、
ダーウィン山脈に入ります。ダーウィ
ン山脈は約四十五日間、この山脈唯一
の未踏峰 Butland も試みる予定で
す。

ダーウィン山脈終了後バイネの登山
とその両側の大陸水原地帯に約一ヶ月
入り、本隊は日本に五月中旬帰る予定
です。

大塚博美様
遠藤 積一
先にお礼方々お知らせまで。
一月十一日

森本次男氏逝く
森本次男氏(会員番号一〇八八
番・昭三・9入会)が昨年十一月
二十六日逝去されました。謹し
んで哀悼の意を表します。

氏は昭和十七年より終身会員とな
りました。その後住所不明で消
息がわからなかったのは非常に残
念でなりません。

朝士門という筆名を持ち、随筆
集としては「山の漂泊」その他が
あり、京都の登山界では目立たぬ
中心人物でありました。享年六十
五歳。

次号からは、「あかね書房」の広告が、上から三段分入る予定です。

★日本岳連十年記念会への本会からの出席者は左記の通り。

松方三郎、渡辺公平、加藤泰安、松田雄一、大塚博美、石原憲治、沼倉寛二郎、小島六郎、山崎安治、星野重高、橋本定昌、高橋照、武内重雄、松長晴利、伊藤久行、村井栄一、古原和美、保坂一、中野満、茂野徹太郎、以上二十名。

編集後記

★六十周年記念山行、山梨支部の分は次号に掲載します。悪しからず。

★筆者へお願い!! いつも七ポイント(この大きさの活字)で組んである所への原稿は、成るべく17字詰めで書いて下さい。

★第二五〇号(四月号)へ原稿を頂きたいと思ひます。締切りは三月十日とします。論文、紀行、研究等々。

★訂正方お願い!! (a)二四五号(11月号)5頁上段、本文6行目、ドームはデュフルシュビツェと御訂正下さい(附図参照)。脇坂氏には御迷惑かけて済みませんでした。(b)二四六号(12月号)4頁上段16行目、四十年を四十一年と訂正。(c)6頁5段急告欄台湾は中華民国大使館と訂正。(d)18頁5段7行深津一男は深瀬と訂正。

★一月号は正月休みその他で発行が大部遅れましたが、二月、三月と順次公式発行日に近づけていきたいと思っています。(吉沢一郎)

昭和四十一年二月十日発行

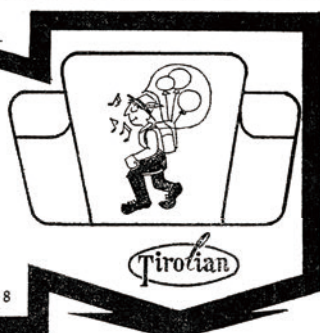
東京 都渋谷区神宮前
三ノ三 一 外苑コーポ内
発行所 法人 日本山岳会

編集代表 吉沢一郎
電話(總)六五〇一七五
直通(副)七六五七七
振替口座東京四八二九番

印刷所 株式会社 技報堂
東京 都港区赤坂堀池五番地

『山岳六十年号落丁のお詫び』

この度会員各位のお手許にお届けしました山岳六十年号に一部落丁のものがございましたのでお知らせ致します。若し落丁のものが届きましたら、送本本会負担にてお取替え致しますから事務所宛お申出下さい。



登山における
人体工学追求の
勝利!!

画期的な新製品

シャモニー

キスリング

株式会社 サクライ

TEL (861) 0933-5 (851) 3356-8